

次世代中医学を目指して：我々は何をすべきなのか？

継承・適合・普及・発展

平馬 直樹

第1回学術総会会頭

中医学を学び、実践する者のひとりとして、私は継承・適合・普及・発展の8文字を常に心がけている。正しい継承、現代医療への適合、医療界・一般社会への普及、学術的技術的な発展の達成である。

正しい継承

継承はまず文献の継承、古典文献においては最善のテキストを学ぶ、歴代の医論、医案を整理して活用可能な形に整理する。重要な古典はテキストデータとして入手可能になっているものも多い。文献の共有を広める条件が整いつつある。それをどう活かすか学会員の力を結集したい。

次に技術の継承は手本とすべき老中医、名人の臨床から学び、学んだものを共有する。学術総会でもことに鍼灸分野では中国からの招待中医師と実技交流を行っている。学んだことをどのように応用し共有し、普遍化するか、方式が求められる。

この作業は、適合・普及・発展の基礎を固めることとなるだろう。2011年の第1回学術総会で私が担当した会頭講演の演題も「中医学の継承」だった。

現代医療への適合

適合は、進歩を続ける現代の医療のどの分野のどのような場合に中医学が貢献できるかを模索し、現代医療の一分野を占めること。そのためには現代医学の各分野のスペシャリストに中医学の方法の理解を求め、共同で臨床研究できる場を広げていきたい。実効性の高い実用の医療を提供することが何よりも求められている。

また、中国や世界各地の中医学の役割を学び、中西医結合を推し進めることも重要と考える。

医療界・一般社会への普及

普及はまず医療界への普及、前項の適合と一体だがどのような場合に中医学を応用できるか、医療界への認知を高めることが求められる。中医学を理解する、さらには担おうとする医療人の養成を進めることも重要で、この考えから、私が学会会長就任後、初めに企画した講習会が「若手医師のための漢方医学セミナー」（通称、阿蘇セミナー）で、私はほぼ裏方にまわり、加島雅之理事に若手医師の養成を任せており、8回のセミナーを通じて学術活動にも参加する有望な人材が育っている。

中医学会では各種の講習会、講座を開いてきたが、さらに拡充する必要がある。専門医制度を整え、中医学の専門人材を養成することも学会の懸案である。

従来の講習会は阿蘇セミナーを除き、東京近辺で開催され首都圏の会員にのみ提供されてきた。オンライン講習が一般化している今、地方の会員にむけてもオンラインの講習会を拡充すべきである。また、地方の会員も講習の講師として協力をお願いすべきだ。

また、一般社会への普及をはかるためには、中医学の認知度を高め、有効性をアピールし続けなければならない。一般を対象とした講演、マスコミへの働き掛けも必要だろう。一般への普及をはかるためにも臨床の場でその要請に応え得る人材の養成は要となる事項である。

学術的技術的な発展

発展は、現代医学が解明する人体の生理、病理、病態、治療のアイデアなどを踏まえて、中医学に何を取り込み、吸収し、紹介し、活用していくか。また、継承した中医学の遺産を現代化して活用できるか。それによって治療領域を広げ、治療効果を高め、中医学の有用性を拡大し、将来に続く進歩の道を築いていくことと考える。

学会として、学会員の研究をどのようにサポートすべきか？ 学術総会の内容と学会誌『日本中医薬学会雑誌』の充実が求められる。

医学・科学の最先端の研究成果、研究方法を中医学に取り込んでいけるか？ 全国的な共同研究、国際的な共同研究をデザインできるか？ など課題が山積みである。

要求される広い視野

上記のうち、ことに適合・発展のためには現代の医療に対する広く深い視野が必要であろう。世界の中医学が現代医療に果たしている役割を広い視野で観察し学び、日本の状況も世界に発信していかなければならない。とりわけ中国の中医学界との交流が有益と考える。

中国との交流

学会では、学会国際交流委員会委員で中医師の馬驥氏の尽力で、2020年4月

11日から7月11日まで7回にわたって、中国でCOVID-19の治療に当たった中醫師から、その経験をZoomを用いたオンラインで学んだ。講師の多くは武漢に入り、中医治療を行った中醫師で、現地の状況、治療方針、治療成績を学んだ。一方的に学ぶ交流であったが、大変有益であり、得るところが多かった。

まず、過去の中医学の感染症との戦いの歴史が活用されていること。さらに近年の感染症流行の治療経験が活かされ、次の流行への備えが整っていたことが印象的だった。

歴史上中医学の発展は、感染症との戦いによって促されてきた。後漢末の戦乱と傷寒のパンデミックで人口が激減するなかで『傷寒論』が編纂された。今回COVID-19の専用処方として開発され、効果が確認され、中国全土で活用された「清肺排毒湯」も『傷寒論』収載の漢方処方、麻杏石甘湯、射干麻黄湯、小柴胡湯、五苓散などが組み合わされものだ。中医学最古の臨床文献である『傷寒論』が治療の基礎となり、活用されている。

金元の戦乱期に繰り返し熱病が流行した際には、劉完素、張從正ら金元四大家が登場し、熱病に対峙し、医学の革新の原動力となった。1232年元軍が金の都開封を包囲し、城内に疫病が蔓延し、死者90万人との記録があるが、この時、四大家の一人李東垣は、邪の排出よりも消耗した体力を補うことに眼目を置き、補中益気湯を創製して多数を救った。補中益気湯は、COVID-19にたいしても、感染予防、抵抗力増強、さらに病後の回復力増進に活用されている。

明代1641年の華北から江南にかけての疫病の流行には、呉又可により『温疫論』が著された。同書収載の呉又可創製の達原飲・三消飲は今回のCOVID-19の治療にもその治療方針、方意が応用された。

このように感染症にたいする歴史的遺産を活用するばかりでなく、特筆すべきは2003年のSARS、2007年の新型インフルエンザの治療経験が生かされ、次の流行に備えられていたことである。

今回、武漢支援の中醫師たちが現地に持ち込んで使用した「三葉」と称される既存の漢方薬製剤（中成薬）は、SARSの治療薬として開発された連花清瘟カプセル、新型インフルエンザの治療薬・金花清感顆粒、重症肺炎の治療薬として中医病院の病棟や救急救命室に備えられている血必浄注射液の三種であった。いずれもすぐに使用できるように製剤化され普及していたものだ。

点滴用注射剤である「血必浄」は活血化癥薬が主成分であり、血管病変の改善のほか、サイトカインストームの予防にも用いられたようである。このように、有事にあって蓄積された中医救急医療、重症呼吸器疾患の治療経験が活用されている。中医病院の救急医療の専門家のレベルが高いことに感服した。

中国には感染症の流行に国を挙げて中医を活用する社会的土壌があり、またそれに答える中医の側の技術レベルが高い。中西医结合は日本よりはるかに進んでいて、社会に広く認知され普及している。中国から学ぶことは多い。

■ オンラインを活用した学術交流

COVID-19の流行のために、学術活動が制限されるなか、日本中医学会では、2020年の第10回学術総会をWebで開催した。上記のCOVID-19のオンライン学習のほか、学会国際交流委員会の企画で海外とWebで交流するようになった。

2011年から毎年参加している台湾の中医国際フォーラムも2020年はWebでの開催となり、私たちもオンラインで参加した。

COVID-19終息後もWebも活用して学会の研究活動を活発化させ、国際交流を密にして、日本の中医学の実力を高め、発展をはからねばならない。私が肝に銘じている中医学の継承・適合・普及・発展は本学会の使命でもあるだろう。次世代の中医学のために私自身ももう少し貢献したいが、道は遙かであろう。学会の次世代の諸先生方に、新しい感覚での発展を託したい。